

鹿児島の近現代文学 (1) 一色次郎『左手の日記』

沖永良部島出身の作家・一色次郎（本名大屋典一1916-1988）は第3回太宰治賞を受賞した「青幻記」（1967年）で知られる。同作は小学校5年生の一色が結核を患った母と島で過ごした半年とその死までを題材としている。一色の活動は文学に留まらず空襲実録、死刑廃止運動など多岐にわたるが、八合事件で獄死した父の無実を突き止めた「太陽と鎖」（1964年）でも知られ、「三歳のとき父が、一〇歳のとき母が非業の死を遂げる」（『日本近代文学大事典』）というように父母の不幸な死が第一に注目され、創作の大きな動因ともなっている。

そんな一色の素顔を知る資料として18-19歳の日記『左手の日記』（1973年）があり75年に文庫化の際は詳細な年譜も加わる。しかし同書の月報で野口富士男は日記中の「路面電車」という呼称が当時なかったことなどから後に「手がくわえられている」と指摘しており、そもそも文学者の「日記」とは虚構と現実のあわいにある。

この日記が単なる記録に止まらないとすれば、一色は何を表現したのか。それは一口に言えば、自らの死への自覚が絶えず突

き動かす、創作への衝動といえる。

こんど、じょうぶになったら、東京へ行きたい。東京へ行って、文学したい。あと五年、あと、三年、一年でいい。（中略）書く。死んだっていい。書いてやる。

当時一色は心臓脚気を患っていた。頼りない自らの生を文学に賭すという、率直な死への怖れと文学への志向が隣合せにされた記述が日記には幾度も反復されている。だが見逃せないのは同書における「俺」の企投が物語外の現実の一色の存在によって成功が保証されていることで、そのため同書は無名の少年が死と向き合いつつ創作と格闘する姿を描きながら読み手はその後年の成功を把握しているという周到な物語性を内包している。さらにこの物語は死（の意識）から生成されるという構造において父の物語「太陽と鎖」、母の物語「青幻記」と相同的関係にあるといえ、一色文学の基調が垣間見える。

（鈴木優作・日本近現代文学）



一色次郎『左手の日記』（青娥書房、1973年）
同『左手の日記他二編』（旺文社文庫、1975年）



『青幻記』の舞台となった、一色の故郷・沖永良部島の海